

憑依した獣火を解き明かす人

尾崎寿一郎著『詩人逸見猶吉』に寄せて

鈴木比佐雄

一人の詩人の詩篇が他者の人生を決めてしまふことがある。尾崎寿一郎さんの評論集『詩人逸見猶吉』を読んでいると、行間から逸見猶吉という詩人に対する深い畏敬の念が熾火おきびのように感じられて、身体にその熱気が伝わってくる。逸見猶吉の詩作行為の全貌は、尾崎さんという研究者によって初めて多くの人にその価値が顕在化された。私は尾崎さんの逸見猶吉に寄せる情熱と読解の深さに言い知れぬ感動を覚える。半世紀もの歳月をかけて取材をし、多くの資料を集め、逸見猶吉の生涯の背景や足跡を浮

約しているの引用してみる。

「逸見猶吉へんみゆうきちという詩人がいた。無頼で酒飲みで漢おとこであった。彼の前に出ると私など男でないような、と身近な詩人は嘆いた。フランス語をこなし、絵描きになりたく、人が好きで生活は下手だった。若くして高級バーを営み、頽廢し、原郷谷中村やなかの田中正造の鉅毒事件の闘いを知って愚行を苛み、北海道をさすらつて獣火けものびを得た。日本の女々しい抒情を蹴散らす、ひと振りの閃光のようなウルトラマリンの詩はそこから生まれた。それは昭和前期に感電のような衝撃を走らせ、「逸見猶吉現象」と呼べる波動を起こした。胸中にした妻子を守ろうとして無軌道をやめた。残した詩は少なく四〇篇ほど。惜しくも敗戦混乱の満

き彫りにして、暗喩などのレトリックに満ちた詩篇の本来的な意図を解き明かし、四〇〇頁にもなる内容で、徹底して書かれた逸見猶吉論は、今まで誰も成し得なかった。逸見猶吉の周りには、「歷程」などのたくさんの詩人たちがいたし、同時代の詩人たち、その後の逸見の天才的な詩語に魅せられた詩人たちの誰もが踏み込めなかつたことを、尾崎さんは膨大な時間を賭け独力で成し遂げてしまったのだ。この書は今後に逸見猶吉を論ずる際の最も重要な研究書となり、読まれ語り継がれていくと私は考えている。本書は第一部「ウルトラマリンの世界」と第二部「火檻樓篇」に分かれている。第一部は序章と五章から構成されている。序章「逸見猶吉と根室」の初めに、尾崎さんが逸見の生涯を要

州に牙を埋めた。」

尾崎さんを魅了した「獣火けものび」とはどんな光を放っていたのだろうか。その「獣火」が昭和の初めから敗戦後まで、どのように激動の時代に向き合い格闘したかを解明することが本書の狙いだらう。二十二歳の逸見は早稲田大学時代の一九二八年に故郷であり廃村になった谷中村（現在は栃木県藤岡町）に立ち寄った後に、北海道に渡りあちこち訪ね後半の一ヶ月は根室に滞在する足掛け三ヶ月の旅をした。その旅の足跡を訪ねるために尾崎さんも北海道に行き関係者に会いその旅行に触れた資料を集めた。逸見の代表作とは、「ウルトラマリン三部作」の「報告」、「兇牙利的」、「死ト現象」と言われている。その三部作にはこの北海道の旅で

見た「ウルトラマリリン（深い透明な群青色）」  
が大きな影響を与えた。と同時に故郷の谷中村  
鉱毒事件を告発し続けた『田中正造之生涯』  
（木下尚江編著）を読み、田中正造や村民側で  
はなく、国や鉱山経営者の側にいた祖父や父た  
ち親族に衝撃を受けた。その意味で北海道に渡  
る目的の一つは、谷中村から追われた村民が開  
拓団となって入植した場所を肌で知ろうとした  
ことだったと、尾崎さんは浮き彫りにしてい  
く。『第一章「兇牙利」とは何か』では、「兇牙  
利」という逸見の造語に秘められた恐るべき言  
葉に肉薄していく。尾崎さんは「兇牙利」とは  
逸見の分身であり、憑依現象であろうという仮  
説を立てていく。逸見の本名は大野四郎であ  
り、祖父と父は谷中村の村長を務めた人物であ

リズムは、谷中村を廃村に追い込んだ国家権力  
の不条理きわまる悪に対し、逸見の中に沸き上  
がった「獸的反抗心」が「獸火」として突っ走  
るのを読み取っていくのだ。

第二章「谷中村と鉱毒事件」では、隠されて  
いた大野一族の鉱毒事件との関わりを辿り、大  
野四郎がなぜ逸見猶吉の筆名に変じていったか  
を論じている。

第三章「内面のドラマ」では、鮎川信夫が  
一九七〇年刊『現代名詩集大成』で詩「兇牙利  
的」などの詩を引用し、「自らの言葉の調子に  
酔っているところがあって、ただでさえ強すぎ  
ると思われる詩人的姿勢を妙に浮き上がらせて  
いるときがある」との評言に対して、鮎川が暗  
喩を自らの詩論の核にしていたにもかかわらず、

り、最後の村長は父であった。藤岡町に合併さ  
れた翌年の一九〇七年に逸見猶吉は古河町の旅  
館で生まれ、東京に移住したので、谷中村の記  
憶はなかった。中学生ごろから原郷の谷中村が  
気になり出し、権力に加担した一族の自己の宿  
命を直視していった。そして日露戦争に突き進  
んでいく国家権力により、谷中村の家々は破壊  
され廃村となる。村の復活を賭けて廃屋で最後  
まで闘った残留村民と田中正造の生き方に逸見  
は純粹に心打たれた。そして北海道をさすらい  
身を苛む中で「獸的反抗心」が憑依していった  
のだと、尾崎さんは読み取るのだ。詩「兇牙利  
的」の二行目に出てくる「苦シク眠ル人」とは、  
田中正造や闘った村民であると尾崎さんは逸見  
の詩の原点を読み取っていく。詩行の猛々しい

逸見の暗喩が全く読めていないと鮎川の批評能  
力の限界を批判している。高野喜久雄の評言も  
鮎川と同様でその印象批評の問題点を指摘して  
いる。

第四章「ウルトラマリリン」では、I「報告」、  
II「死ト現象」、III「厲シイ天幕」、IV「ベエリ  
ング」、V「火ヲ享ケル」、VI「冬ノ吃水」、VII  
「曝サレタ歌」の七篇の代表的な詩を掲出しな  
がら、逸見のリズムに隠されている獸的な「オ  
レ」の生み出す暗喩や換喩を交えた高度なレト  
リックの試みを解き明かしている。この尾崎さ  
んの読解力は、あたかも逸見の内面に憑依した  
ような凄みを感じさせてくれる。このように逸  
見の内面と時代背景の関係に入り込まなければ、  
逸見の詩の読解は不可能であることを尾崎さん

は身を持って示している。戦前の「詩と詩論」などの詩人たちを踏み台にして、戦後詩を別次元のものとしようとした鮎川信夫は、冷静に先輩世代の詩人たちを評価することが出来なかった。その意味でも尾崎さんの逸見猶吉の詩篇への冷静で徹底的な読解力は、戦後詩が見落としていた逸見の詩篇が投じられた「詩と詩論」「歷程」「満州浪漫」などでの詩活動の正当な歴史の評価を促していると思われる。

第五章「牙のある肖像」でも、十一篇の詩「煉瓦台にて」、「大外套」、「牙のある肖像」、「悪霊」、「蠅の家族」、「神の犬」、「燼」、「ナマ」、「終駅」、「途上」、「銀座にて」などで、その詩が書かれた時代背景を踏まえて読み解くことを試みている。

満州に渡り、日蘇通信社のソ連情報集めに従事していく。また「満州浪漫」という雑誌の同人になり、詩「汗山」<sup>ハンショウ</sup>、「海拉爾」<sup>ハイラル</sup>、「哈爾濱」<sup>ハルビン</sup>を寄稿する。後者二篇はロシアが清国との密約で造った東支鉄道の駅名であり街である。満州に行かなければ書くことの出来なかった詩篇の中でも、逸見は大陸侵略の軍国主義を批判し続けた。だが大政翼賛会の国家圧力の強まる中で、戦争協力詩である「歴史」を新京中央放送局の依頼によって書くことになる。友人には、行くのをやめようと冷酒を飲んだが、考え直して放送局に行ったといい、「やむをえないのだ」と語ったそうだ。

敗戦の翌年の一九四六年に妻と小児麻痺の子を含めた四人の子を残し、逸見は結核と栄養失

第二部「火襪襦篇」は第一章「満州に渡るまで」、第二章「満州文学と日支事変」、第三章「戦争協賛詩と大東亜戦争」に分かれ、章扉には逸見の眉が太く髭面で何か絶望や悲劇に立ちすくんでいる顔写真がある。この写真は尾崎さんによると敗戦後の満州で「日僑俘」（日本人の居留民としての捕虜の意味）として身分証明書に貼付されていたものだという。尾崎さんは逸見が詩「大外套」「ナマ」「群」などで満州侵略に強烈な批判を持っていたにもかかわらず、誰にも理解されず満州に渡る経緯を辿っている。日蘇通信社に勤め、『月間ロシア』に携わり、満州に出張取材も始まる。軍の情報機関であった。妻子を養うためそんな仕事に関わらざるを得なくなったという。そして妻子を連れて

調で息絶えたという。死の床には木山捷平や長谷川瀋ら多くの友人たちが集まり、「ウルトラマリン」や「ハイラル」が朗読されて朝まで逸見を偲んだ。そして翌々日に愛用の徳利とランボーの原書と一緒に亡骸は石油と薪で燃やされた。尾崎さんは逸見の生涯を詩篇の解説と友人たちの証言から描き切った。私は尾崎さんの精神に逸見の魂が乗り移ったかのような凄みの余韻を感じながら本書を閉じた。難解で破壊的とされた逸見猶吉の本格的な研究は、この書から始まるに違いない。逸見猶吉の詩において「苦シク眠ル人」に田中正造や闘う村民を、また「獣火」に逸見が命を賭けた創造行為の激しさを発見するだろう。多くの逸見猶吉を愛する読者と未知の読者に本書を届けたい。

尾崎寿一郎評論集『詩人逸見猶吉』栞解説文  
鈴木比佐雄

コールサック社

2011